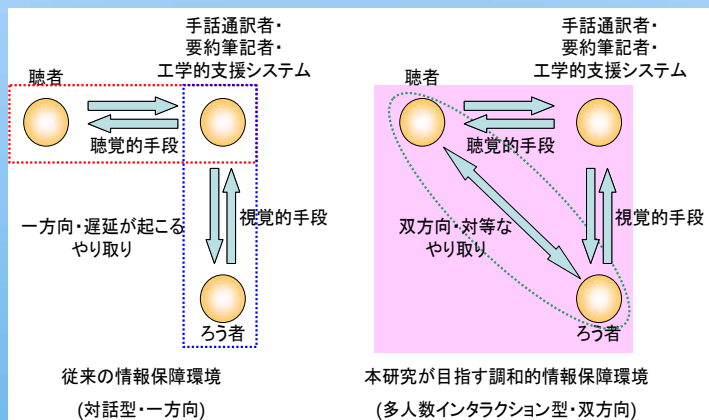


インタラクション理解に基づく 調和的情報保障環境の構築

【研究の概要】

情報機器の発展はろう者(日本手話を生活言語とする人々)の生活に大きな変化をもたらしてきました。例えばポケベルや携帯メールは外出先での連絡を可能にし、自宅でFAXを待つ従来の生活を一変させました。今後は映像通信技術の発展に伴い、手話を用いた映像による社会参画の機会が増えると予想されます。本研究では、遠隔地にいるろう者と聴者が対等に議論可能な場として、映像通信技術を用いた調和的情報保障環境の構築とそのガイドライン作成を目指します。

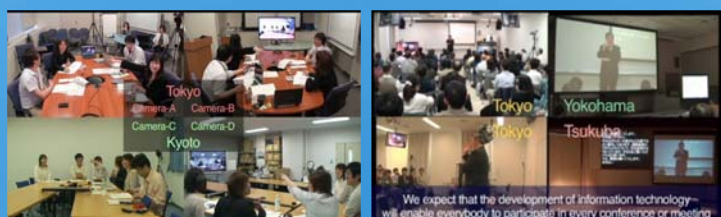
目指している情報保障環境：



現状：通訳者への負荷が高すぎる
ろう者と聴者の関係が希薄

対話型から多人数インタラクション型へ
使用言語の異なるろう者と聴者のやり取り
遠隔コミュニケーションモデルの提案
参与役割を理解した多人数型情報伝達

活動：
学術ミーティング支援・学会支援



坊農研での読書会風景

日本手話学会での講演

課題：

学術的内容に対する手話通訳団の組織
遠隔手話通訳時の問題点の把握
ろう者の社会参画の促進とその仕組み作り

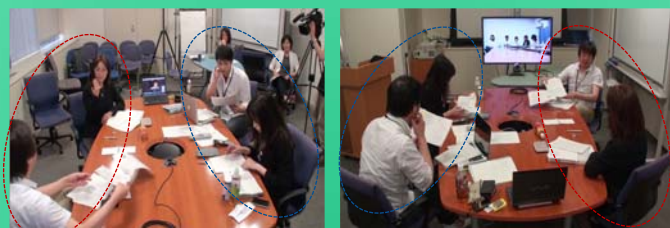
分析事例：二つの言語が出会うとき



参与枠組みGoffman(1981)

H: 聴者
D: ろう者
I: 手話通訳者

視覚的参与枠組みと聴覚的参与枠組み



人工物(モニタ・紙資料)等へのアクセス
手話通訳者がつなぐ二つの参与枠組み
(詳しくはビデオ分析をご覧ください)

【10年先に目指すもの】

- ・情報技術による支援
バリアフリーなインタラクション環境のデザイン
実空間とバーチャル空間の調和的融合
- ・社会基盤の構築
誰もがアクセス可能な情報保障ガイドラインの整備
当事者と共に学術的議論可能な場の提供

連絡先: 坊農真弓(コンテンツ科学研究系)

bono@nii.ac.jp